

新学習指導要領で評価が変わる！

新学習指導要領における学習評価の進め方 (中学校 音楽科)



平成 24 年度から，中学校では新学習指導要領が全面実施となります。新学習指導要領の趣旨を反映した学習評価の考え方については，平成 23 年 7 月に「評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料」が，国立教育政策研究所教育課程研究センターから示されているところです。この「学習評価の進め方」は，新学習指導要領に基づく学習評価を円滑に進めていくための手引きとして，佐賀県教育センターが作成したものです。各学校における新学習指導要領に基づいた指導と評価を推進していくためにお役立てください。

(主な内容)

- 1 新学習指導要領の趣旨を反映した学習評価の考え方とその具体
- 2 中学校音楽科における教科目標，評価の観点とその趣旨について
- 3 中学校音楽科における学習評価の進め方
- 4 中学校音楽科における学習評価事例
- 5 中学校音楽科における学習評価の進め方 Q & A



新学習指導要領の趣旨を反映した学習評価の基本的な考え方

新学習指導要領の下での学習評価については、児童生徒の「生きる力」の育成をめざし、児童生徒の一人一人の資質や能力をより確かに育むようにするため、目標に照らしてその実現状況をみる評価（目標に準拠した評価）を着実に実施し、児童生徒一人一人の進歩の状況や教科の目標の実現状況を的確に把握し、学習指導の改善に生かすことが重要です。併せて、学習指導要領に示す内容が確実に身に付いたかどうかの評価を行うことが求められています。

各学校における学習評価の進め方と留意点

各学校においては、評価規準を適切に設定するとともに、評価方法の工夫改善を進めること、評価結果について教師同士で検討すること、実践事例を着実に継承していくこと、授業研究等を通じ教師一人一人の力量の向上を図ること等に、校長のリーダーシップの下で、学校として組織的・計画的に取り組むことが必要です。また、年間指導計画を検討する際には、それぞれの単元（題材）において、観点別学習状況の評価に係る最適の時期や方法を観点ごとに整理することが重要です。このことが、評価すべき点を見落としがないかの確認や、必要以上に評価機会を設けることによる無駄を省き、効果的・効率的な学習評価を行うことにつながります。

新学習指導要領における学習評価の観点について

(1) 従前と新学習指導要領における学習評価の観点

従前の観点	新学習指導要領における観点
「関心・意欲・態度」	「関心・意欲・態度」
「思考・判断」	「思考・判断・表現」
「技能・表現」	「技能」
「知識・理解」	「知識・理解」

(2) 新学習指導要領における学習評価の観点的説明

「関心・意欲・態度」

これまでと同様、各教科の学習に即した関心や意欲、学習への態度等を対象としたもので、その趣旨に変更はありません。

「思考・判断・表現」

「表現」については、基礎的・基本的な知識・技能を活用しつつ、各教科の内容に即して考えたり、判断したりしたことを、児童生徒の説明・論述・討論などの言語活動等を通じて評価することを意味しています。つまり、ここでいう「表現」とは、これまでの「技能・表現」で評価されていた「表現」ではなく、思考・判断した過程や結果を言語活動等を通じて児童生徒がどのように表出しているかを内容としています。

「技能」

従前において「技能・表現」として評価されていた「表現」も含む観点として設定されています。

「知識・理解」

これまでと同様、各教科において習得した知識や重要な概念を習得しているかどうかを内容としたもので、その趣旨に変更はありません。

中学校音楽科における教科目標，評価の観点及びその趣旨

1 教科目標

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽を愛好する心情を育てるとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽活動の基礎的な能力を伸ばし、音楽文化についての理解を深め、豊かな情操を養う。

「音楽文化についての理解を深め」ることが新たに規定されています。音楽科の学習は本来、音楽文化そのものを対象にした学習であるという音楽科の性格を明らかにしたものです。

2 評価の観点及びその趣旨

音楽への 関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能	鑑賞の能力
音楽に親しみ、音や音楽に対する関心を持ち、主体的に音楽表現や鑑賞の学習に取り組もうとする。	音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、音楽表現を工夫し、どのように表すかについて思いや意図をもっている。	創意工夫を生かした音楽表現をするための技能を身に付け、歌唱、器楽、創作で表している。	音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、解釈したり価値を考えたりして、よさや美しさを味わって聴いている。

評価の観点がこれまでと変わったところは？

思考・判断したことを(言語)表現することの違いを明確にするために、従前の「表現」という文言は「音楽表現」と改められました。ここでいう「音楽表現」とは、実際に「歌ったり、演奏したり、曲をつくったりして表す」ということになります。

これまでの「音楽的な感受や表現の工夫」の観点は、「音楽表現の創意工夫」として、表現領域における評価の観点となりました。

「鑑賞の能力」の観点は、文言の変更はありませんが、これまで「音楽的な感受や表現の工夫」で評価していた鑑賞における音楽的な感受の部分も合わせて、この観点で評価することとなりました。

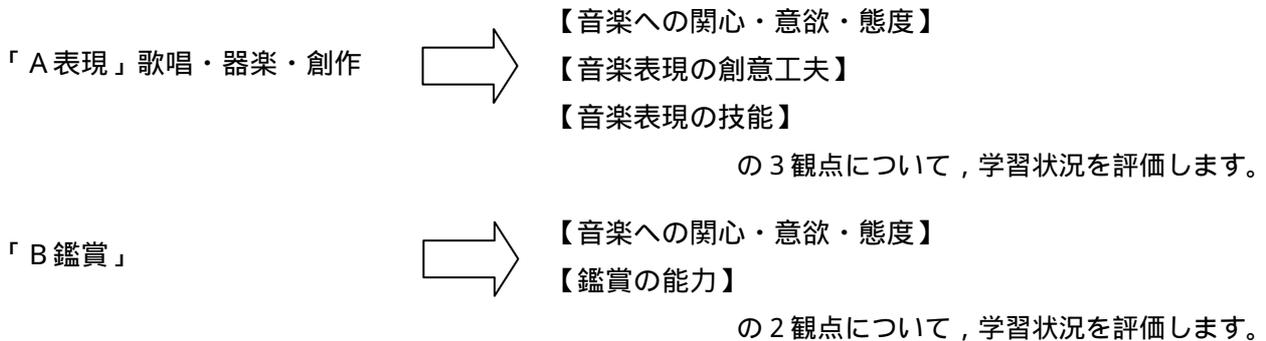
3 学年別の評価の観点の趣旨

	音楽への 関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能	鑑賞の能力
第1学年	音楽活動の楽しさを体験することを通して、音や音楽に対する関心を持ち、主体的に音楽表現や鑑賞の学習に取り組もうとする。	音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、音楽表現を工夫し、どのように表すかについて思いや意図をもっている。	創意工夫を生かした音楽表現をするための技能を身に付け、歌唱、器楽、創作で表している。	音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、解釈したり価値を考えたりして、多様な音楽のよさや美しさを味わって聴いている。
第2・3学年	音楽活動の楽しさを体験することを通して、音や音楽に対する関心を高め、主体的に音楽表現や鑑賞の学習に取り組もうとする。	音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、ふさわしい音楽表現を工夫し、どのように表すかについて思いや意図をもっている。	創意工夫を生かした音楽表現をするための技能を伸ばし、歌唱、器楽、創作で表している。	音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、解釈したり価値を考えたりして、多様な音楽に対する理解を深め、味わって聴いている。

中学校音楽科における学習評価の進め方

1 評価規準の設定例と各観点の評価方法について

中学校音楽科の内容のまとめりごとの評価の観点は？



評価規準は、どうやって設定するの？

各学校において、評価規準を設定するに当たっては、国立教育政策研究所から公開されている「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」（以下、参考資料と表記）に示されている評価規準の設定例を活用するなどして、題材の指導のねらい、教材、学習活動等に応じて、学習状況を適切に評価することのできる評価規準を設定することが重要となります。題材によっては、複数の評価規準の設定例を参考にしながら、実際の指導に対応した評価規準を設定するなどの工夫も望まれます。

例えば、参考資料の評価規準の設定例を活用して、次のような手順で評価規準を設定することができます。

「赤とんぼ」の拍子、速度、旋律の音のつながり方やフレーズ、強弱に着目して、歌詞の内容や曲想を感じ取って歌う学習（学習指導要領の内容は、第1学年の「A表現」(1)歌唱の事項ア、〔共通事項〕のうち、リズム（拍子）、速度、旋律（音のつながり方、フレーズ）、強弱などを扱う。）について、その学習状況を《音楽表現の創意工夫》の観点で評価する場合は、

題材で取り扱う指導事項、〔共通事項〕を明確にしましょう。

参考資料の第2編に示されている「評価規準の設定例」（第2「第1学年」3(1)【「A表現・歌唱」の評価規準の設定例】）の中から、

《音楽を形づくっている要素（音色、リズム、速度、旋律、テクスチャ、強弱、形式、構成など）を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、歌詞の内容や曲想を感じ取って音楽表現を工夫し、どのように歌うかについて思いや意図をもっている》を参考にして、

題材の指導のねらい、教材、学習活動等に応じて加筆修正します。

《「赤とんぼ」の拍子、速度、旋律の音のつながり方やフレーズ、強弱を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、歌詞の内容や曲想を感じ取って音楽表現を工夫し、どのように歌うかについて思いや意図をもっている》のように設定することができます。

各観点における評価内容と評価を行うに当たっての留意点

【音楽への関心・意欲・態度】の評価

この観点は、生徒が学習内容や学習活動に興味・関心をもち、歌唱、器楽、創作、鑑賞の学習に主体的に取り組もうとする意欲や態度を身に付けているかどうかといった学習状況を評価するものです。

挙手や発言の回数、授業態度の善し悪しや忘れ物の有無などだけで見るのではなく、その授業の指導のねらいや学習活動を踏まえて、学習の対象に対する関心や意欲がどうであるかということの評価をよう心掛けましょう。また、生徒の自己評価なども参考にすることは可能ですが、自己評価の結果がそのまま教師の評価にはなり得ないということには留意する必要があります。

この観点は、ある程度長い区切りの中において、適切な頻度で多面的に評価することが大切です。

【音楽表現の創意工夫】の評価

この観点は、生徒が音楽を形づくっている要素（音色、リズム、速度、旋律、テクスチャ、強弱、形式、構成等）や要素同士の関連を知覚し、それらの働きによって生み出される特質や雰囲気を感じながら音楽表現を工夫し、どのように音楽を表現するのか（歌うのか、演奏するのか、曲をつくるのか）ということについての思いや意図をもつことができているかといった学習状況を評価するものです。

この観点では必ずしも音楽表現を伴ってなくても、どのように音楽を表現したいのかといった思いや意図をもつことができているれば評価できるので、活動中の行動の観察やワークシートの記述などもその手掛かりとなります。また、題材構想において、個人やグループで音楽表現を工夫するような学習活動を確実に位置付けることが大切となります。学級の人数にもよりますが、学習活動中に全ての生徒の状況を把握することは難しいことが考えられますので、ワークシートの記述など授業後に評価できるような方法も位置付けて、行動の観察とワークシートの記述などを相互補完的に評価するなどの工夫が望まれるところです。

【音楽表現の技能】の評価

この観点は、生徒が実際に歌ったり、楽器を演奏したり、音楽をつくったりしている様子から、創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な技能を身に付けて、実際に音楽を表現することができるかどうかといった学習状況を評価するものです。

この観点は実際に歌ったり演奏したりしている状況の評価する必要があります。したがって、評価するポイントを明確にした教師用チェックリストを準備するなどして、全ての生徒の状況を確実に把握するような工夫が大切となります。また、「タンギングができている」「運指をまちがえない」といったようなことも大切ですが、それだけで技能を評価するのではなく、その学習において創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な技能としてどのような技能があるかといった教師の見極めをしっかりと行うよう心掛けましょう。さらに、技能の習得が図られるには、相応の時間が必要であることを考えると、題材の後半に評価場面を位置付けるなどの工夫も必要となるでしょう。

【鑑賞の能力】の評価

この観点は、生徒が音楽を形づくっている要素（音色、リズム、速度、旋律、テクスチャ、強弱、形式、構成等）や要素同士の関連を知覚し、それらの働きによって生み出される特質や雰囲気を感じながら、音楽を形づくっている要素や構造と曲想の関わり、音楽の多様性を感じ取ったり、音楽の特徴をその背景となる文化・歴史や他の芸術と関連付けたりしながら、解釈したり価値を考えたりして鑑賞しているかどうかといった学習状況を評価するものです。

この観点では、生徒が音楽を形づくっている要素や構造（要素同士の関連と同義です）を知覚し、それらのはたらきによって生み出される特質や雰囲気を感受することができているかということと、それらを支えとして、解釈したり価値を考えたりして鑑賞しているかということとを評価することとなりますので、題材を構想する段階でこれらとについて評価する場面を適切に位置付けることが大切です。また、鑑賞活動の評価では、生徒の発言やワークシートへの記述などによるところが大きくなります。したがって、適切に言語活動を位置付けることやワークシートに記述させる内容を十分に吟味することなどの工夫が必要です。「言葉で説明する」（第1学年）、「根拠をもって批評する」（第2学年及び第3学年）などの活動が位置付けられていますが、その活動だけではなく、その活動に至るまでの授業で知覚・感受を支えとした学習を充実させることにも十分に留意してください。

具体的な評価方法例と留意点

観察

もっともよく使われる方法であり、いずれの観点の評価方法としても用いることが可能です。しかしながら、漠然と観察を行うのでは、主観的であったり、偏りがあったりすることも考えられます。例えば、「音楽への関心・意欲・態度」を評価するのか、「音楽表現の創意工夫」を評価するのかといった評価する観点を明確にしたり、どのような点についてチェックするのかといったことを事前に決めて、教師用チェックリストを作成しておいたりするなどの工夫が必要です。

ワークシートの記述（批評文の記述）

ワークシートの記述は、授業後に全ての生徒の学習状況について把握することが可能であり、学習活動の観察などと併用することで補完的に評価を進めることができます。また、「音楽表現の創意工夫」、「鑑賞の能力」の評価を進めるに当たっても、個人の状況を把握するための有効な手立てです。そのためには、学習のねらいに沿って、生徒が思考・判断したことを記述することができるようにワークシートを工夫することが大切です。また、鑑賞の学習においては、ワークシートに批評文を記述させることなども考えられますが、その際に、それまでの学習において自分が知覚・感受したことなどの学習履歴を記録に残すことができるようにしておくことが大切です。さらには、学習のねらいと照らし合わせて、批評文を評価する際の視点をあらかじめ明確にしておき、書いている量などのみで評価することがないように心掛ける必要があります。

演奏

個人またはグループで学習の成果を生かして演奏をする場面があります。特に「音楽表現の創意工夫」、「音楽表現の技能」の評価に当たっては、学習の成果を評価するのに適した場面です。しかしながら、その最終的な演奏の結果だけが全てということではなく、個々の生徒の実態に応じて、その結果に至るまでの学習活動の様子を十分に考慮するなどの配慮も必要です。また、この演奏において、学習のねらいに沿った演奏が

できるようにそれまでの形成的な評価とそれに基づく適切な指導が必要ということはいうまでもありません。

作品

創作学習においては、学習の成果としての生徒の作品を評価することとなります。創作分野の評価においては「音楽表現の創意工夫」と「音楽表現の技能」を分けて評価するところに難しさもありますが、学習活動において指導したことを踏まえて、その題材における創作学習の「音楽表現の技能」とは何かということなどをあらかじめ明確にしておくことが大切です。作品は五線譜に記したものだけでなく、演奏の録音などの場合も考えられますので、歌唱や器楽による音楽表現の技能ではなく、創作の音楽表現の技能を適切に評価するように心掛けておく必要があります。

レポート

鑑賞学習などにおいては、作成したレポートなどを評価の対象とする場合も考えられます。ここでは、レポートを通して何を評価するのかということを確認しておく必要があります。レポートの項立てを指示する際などに、音楽を自分が聴き取り、感じ取ったことと調査したことを関連付けて、自分なりに解釈したり、価値を考えたりしたことを記述することができるような項を設定するなどの工夫をして、音楽科の学習における評価ができるように配慮することが必要です。単に調査した内容の詳しさやレポートの見栄えなどで評価するようなことがないようにすることが大切です。

ペーパーテスト

中学校では学期末などにテストを行うことが多いと思います。ペーパーテストは評価方法の一つとして有効ですが、ペーパーテストにおいて得られる結果が、目標に準拠した評価における学習状況の全てを表すものではないことについては、十分に認識しておく必要があります。テストの問題を作成する際は、観点別に作成し、その観点を評価する問題として適切であるかどうかを学習活動との関連を踏まえて、十分に吟味しておく必要があります。また、「知識・理解」に関する内容は出題しやすいのですが、音楽科における観点の中で、「知識・理解」に特化した観点はないことから、「知識・理解」に関する内容を出題する際は、それらをどの観点に関わる評価として位置付けるのかなどについて確認しておくことが大切です。さらに、可能であれば、放送などを利用して、実際に音や音楽を聴取して解答する問題を設定するなどの工夫ができればよいと思います。

実技テスト

題材の最後や学期末に実技テストを行うこともあると思います。「音楽表現の技能」や「音楽表現の創意工夫」の評価は、実際に音楽表現をさせる中で見取ることが望ましいと考えられます。しかしながら、安易に実技テストを行うのではなく、題材の学習の中での発表などを適切に位置付けるなどの工夫が必要です。実技テストを設定する場合は、その時間も授業であることを考えたときに、個々の生徒の音楽表現の技能や創意工夫のよさを学級全員で共有できるような配慮も必要であると考えます。「音楽表現の技能」の習得状況は、実技テストなどの演奏を通して評価することができますが、「音楽表現の創意工夫」はその限りではないということに配慮することが必要です。

学習評価において大切なことは、授業において教師が指導したことについて適切な場面を設定し、適切な方法で評価をすることです。そのためにも、印を付けた評価方法だけに偏ることなく、毎時間の授業の中で計画的・継続的に評価を進めることが大切です。

題材全体を見通して、学習評価の進め方が分かる事例

本事例は、「大地讃頌」(大木惇夫作詞/佐藤真作曲)を教材として混声四部合唱に取り組み歌唱の題材です。学習指導要領の内容は、「A表現」(1)歌唱の指導事項ア,ウ,〔共通事項〕のうち、旋律、強弱、テクスチャなどを扱います。

導入時において、教材曲を聴取し、感じ取ったことを基にしながら、歌詞の内容及び曲想に対する関心を高めるとともに音楽表現を創意工夫する視点をもたせませす。その上で各パートの正しい音程とリズムで歌うことができるようにし、歌詞の内容及曲想を味わって、曲にふさわしい音楽表現を工夫し、声部と全体との関わりを理解して、それらを生かした音楽表現を工夫します。

ここでは、全6時間で題材を構成し、1単位時間に1つ~2つの評価規準を設定しています。

- 1 題材名 混声四部合唱の響きを味わおう 第3学年「A表現・歌唱」
教材名 「大地讃頌」(大木 惇夫 作詞/佐藤 真 作曲)



2 題材の目標

- (1) 「大地讃頌」の歌詞の内容及曲想、混声四部合唱における声部の役割と全体の響きとの関わりに関心をもち、音楽表現を工夫しながら合わせて歌う学習に主体的に取り組もうとしている。
- (2) 「大地讃頌」の旋律、強弱、テクスチャを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、歌詞の内容及曲想を味わう、声部の役割と全体の響きとの関わりを理解するなどして、曲にふさわしい音楽表現を創意工夫する。
- (3) 創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な発声、発音、呼吸法などの技能を身に付けて歌う。

3 題材の評価規準

音楽への 関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能
「大地讃頌」の歌詞の内容及曲想に関心をもっている。 「大地讃頌」の歌詞の内容及曲想を生かし、曲にふさわしい音楽表現を工夫して歌う学習に主体的に取り組もうとしている。 「大地讃頌」の混声四部合唱における声部の役割と全体の響きとの関わりに関心をもち、音楽表現を工夫しながら合わせて歌う学習に主体的に取り組もうとしている。	「大地讃頌」の旋律、強弱、テクスチャを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じている。 知覚・感受しながら、「大地讃頌」の歌詞の内容及曲想を味わって曲にふさわしい音楽表現を工夫し、どのように歌うかについて思いや意図をもっている。 知覚・感受しながら、「大地讃頌」の混声四部合唱における声部の役割と全体の響きとの関わりを理解して音楽表現を工夫し、どのように合わせて歌うかについて思いや意図をもっている。	「大地讃頌」の歌詞の内容及曲想を生かした、曲にふさわしい音楽表現をするために必要な発声、発音、呼吸法などの技能を身に付けて歌っている。 「大地讃頌」の混声四部合唱における声部の役割と全体の響きとの関わりを生かした音楽表現をするために必要な発声、読譜の仕方などの技能を身に付けて歌っている。

各観点の評価規準は、「A表現」(1)歌唱の指導事項ア,ウ,〔共通事項〕のうち、旋律、強弱、テクスチャに対応して設定しています。

音楽への関心・意欲・態度は、指導事項アに関わる評価規準を学習過程に合わせて、とに分けて示しています。

音楽表現の創意工夫は、指導事項ア,ウに関わる評価規準を知覚・感受と知覚・感受したことを基にした創意工夫の部分に分けて、と、のように分けて示しています。



4 題材の指導と評価の計画（全6時間）

ねらい 学習内容 ・学習活動	評価規準	評価方法（ ）とその進め方
<p>第1時 旋律，強弱，テクスチャを知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら，「大地讃頌」を聴取し，歌詞の内容に関心をもって主旋律の歌唱に取り組む。</p>		
<p>「大地讃頌」を聴いたり，主旋律を歌ったりして，旋律，強弱，テクスチャを知覚・感受する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「大地讃頌」のCDを聴き，印象や気付いたことなどを自由に話し合う。 ・主旋律を受け持っているパートを確認しながら，全員で主旋律を歌う。 ・旋律，強弱，テクスチャに着目して，「大地讃頌」を聴き，気付いたことを学級で共有する。 「大地讃頌」の歌詞の内容に関心をもって主旋律を歌う。 ・歌詞の内容を知る。 ・歌詞の内容を考えて，主旋律を歌う。 ・再び，「大地讃頌」のCDを聴き，歌詞の内容と，それを表現するために工夫されていると思うことを旋律，強弱，テクスチャに着目してワークシート（以下，WSと表記）に記述する。 	<p>《創 - 》 《関 - 》</p>	<p>《創 - 》 ワークシート</p> <p>本時の学習を通して，旋律，強弱，テクスチャを知覚・感受することができているかということの評価するので，授業の終末で記述するWSの記述内容を基に評価を行う。</p> <p>《関 - 》 観察，ワークシート</p> <p>歌詞の内容や曲想に関心をもつことができているかということの評価するので，学習過程における活動の観察や発言内容を基に評価を行うが，全ての生徒の評価が難しいことから，ワークシートに記述した歌詞の内容と工夫点も補完的に評価する。</p>
<p>第2時 「大地讃頌」の歌詞や曲想に関心をもって，自分が担当するパートの旋律を歌う。</p>		
<p>「大地讃頌」の歌詞の内容や曲想を生かした音楽表現をすることに興味をもって，自分が担当するパートの旋律を歌う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各声部の読譜の仕方を知る。 ・前時の学習を踏まえて，自分が担当するパートを歌う際に工夫できそうなことを考え，WSに記述する。 ・パートに分かれて自分が担当するパートを正しい音程とリズムで歌う。 「大地讃頌」の前半（18小節目まで）を混声四部合唱で合わせて歌う。 ・最初にWSに記述したことを意識して，前半部分の歌唱活動に取り組む。 ・歌唱活動の後に，実際に歌ってみてさらに工夫できそうと思ったことを最初のWSに書き加える。 	<p>《関 - 》</p>	<p>《関 - 》 ワークシート，観察</p> <p>授業の前半でWSに記述する内容と授業の終末で書き加えた内容を合わせて評価する。「音楽への関心・意欲・態度」を評価するので，内容の適切さだけではなく，音楽表現を工夫する活動に対する意欲の表れや記述の量なども含めて判断する。また，授業中の観察において，歌詞の内容と曲想を生かして主体的に音楽表現の工夫に取り組んでいる姿が見られた生徒についてはそのことも考慮する。</p>
<p>第3時 発声や読譜の仕方を身に付け，「大地讃頌」の自分が担当する声部の役割を考えながら，自分が担当するパートを歌う。</p>		
<p>「大地讃頌」の声部の役割を考えながら，自分が担当するパートの旋律を歌う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各パートの発声の仕方について知る。 ・パートに分かれて，発声に気を付けながら，自分が担当するパートを正しい音程とリズムで歌う。 「大地讃頌」の後半部分（27小節から最後まで）を混声四部合唱で合わせて歌う。 ・他のパートとの関わりを意識しながら，後半部分の歌唱活動に取り組む。 	<p>《技 - 》</p>	<p>《技 - 》 観察（教師用チェックリスト）</p> <p>前時に指導した読譜の仕方や本時に指導した発声の仕方などが身に付いているかを評価する。特に「十分満足できる」状況（A）と「努力を要する」状況（C）の生徒の評価に努め，後者については併せて，適切な指導も行う。</p>
<p>第4時 発声，発音，呼吸法などの技能を身に付け，歌詞の内容や曲想を味わって，曲にふさわしい音楽表現を工夫しながら「大地讃頌」を混声四部合唱で合わせて歌う。</p>		
<p>「大地讃頌」の音楽を形づくっている要素を知覚・感受し，歌詞の内容や曲想を味わって，曲にふさわしい音楽表現を追求する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「大地讃頌」の歌唱活動を通して，感じ取ったこと，どのように歌うかなどについてパートで意見交換をする。 	<p>《創 - 》 《技 - 》</p>	<p>《創 - 》 ワークシート</p> <p>パートでの意見交換や表現を工夫する活動を行ったことを踏まえて，個人でWSに記述した内容を評価する。</p>

<ul style="list-style-type: none"> ・CDを聴いて参考にしたり，歌ったりしながら曲にふさわしい音楽表現を工夫する。(パート) ・感じ取ったことやどのように歌うかについての思いや意図，特に表現を工夫するポイントとその理由をWSに記述する。(個人) 曲にふさわしい音楽表現を工夫しながら「大地讃頌」を混声四部合唱で合わせて歌う。 ・パートで意見交換したことや個人でWSに記述したことを基に，学級全体で意見交換しながら，音楽表現を工夫する。 ・曲にふさわしい音楽表現をするために必要な発声，発音，呼吸法などの技能を確認しながら合わせて歌う。 		<p>《技 - 》 観察(教師用チェックリスト) 発声，発音，呼吸法など，「大地讃頌」の歌唱活動に関わって指導したことが身に付いているかを評価する。特に「十分満足できる」状況(A)と「努力を要する」状況(C)の生徒の評価に努め，後者については併せて，適切な指導も行う。</p>
<p>第5時 声部の役割と全体の響きとの関わりに関心をもち，「大地讃頌」の混声四部合唱における声部の役割と全体の響きとの関わりを理解して，音楽表現を工夫しながら歌う。</p>		
<p>「大地讃頌」の混声四部合唱における声部の役割と全体の響きとの関わりに関心をもち，関わりを理解して音楽表現を追求する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・声部の役割と全体の響きとの関わりについて，楽譜を見ながら確認する。 ・確認したことを踏まえて，音楽表現の工夫ができそうなことを考え，WSに記述する。(個人) ・個人でWSに記述したことを基に，意見交換をし，さらにアイデアを広げて，自分のWSに書き加える。(パート) 音楽表現を工夫しながら「大地讃頌」を混声四部合唱で合わせて歌う。 ・パートでの意見交換を踏まえて，学級全体で音楽表現の工夫を共有し，実際に歌って試す。 ・混声四部合唱での歌唱活動を通して，声部の役割と全体の響きとの関わりを踏まえて，自分が音楽表現の工夫をできたと思うことや，次時に向けてさらに工夫しようと思うことをWSに記述する。(個人) 	<p>《関 - 》 《創 - 》</p>	<p>《関 - 》 ワークシート，観察 声部の役割と全体の響きとの関わりについて理解を深めた上で，WSに記述したことを評価する。授業の前半における個人の記述とパートでの意見交換を踏まえて書き加えた記述を評価する。「音楽への関心・意欲・態度」を評価するので，内容の適切さだけではなく，音楽表現を工夫する活動に対する意欲の表れや記述の量なども含めて判断する。また，授業中の観察において，声部の役割と全体の響きとの関わりに関心をもって，主体的に音楽表現の工夫に取り組んでいる姿が見られた生徒についてはそのことも考慮する。</p> <p>《創 - 》 ワークシート 本時の学習を通して，授業の終末に記述した内容を評価する。ここでは「音楽表現の創意工夫」を評価するので，実際に音楽表現の工夫ができたかどうかではなく，本時にどのように歌ったのか，また，次時にどのように歌いたいのかということについての思いや意図をもっているかを評価する。</p>
<p>第6時 発声，発音，呼吸法，読譜の仕方などの曲にふさわしい音楽表現をするために必要な技能を身に付けて，「大地讃頌」を混声四部合唱で合わせて歌う。</p>		
<p>「大地讃頌」をどのように歌うかについての思いや意図を再確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これまでの学習を振り返って，取り組んできた音楽表現の工夫をパートで確認しながら歌う。 「大地讃頌」の歌詞の内容や曲想を味わうとともに，混声四部合唱における声部の役割と全体の響きとの関わりを理解して，混声四部合唱で合わせて歌う。 ・パートで確認したことを紹介し合う。 ・混声四部合唱で合わせて歌い，録音をする。 ・録音した合唱を聴き，そのよさなどを学級で共有する。 	<p>《技 - 》 《技 - 》</p>	<p>《技 - 》《技 - 》 観察(教師用チェックリスト) 第3・4時に，「努力を要する」状況(C)にあった生徒を中心に評価する。また，「おおむね満足できる」状況(B)の生徒についても技能の向上が見られれば評価結果を修正する。</p>

「音楽表現の技能」と「音楽表現の創意工夫」の評価の進め方が分かる事例

本事例は、「おやおやおやさい」(石津ちひろ 文/山村浩二 絵 福音館書店)という絵本を教材とした創作の題材の第2時 全3時間を示しています。学習指導要領の内容は、「A表現」(3)創作の指導事項ア、〔共通事項〕のうち、リズム、旋律、構成などを扱います。

「おやおやおやさい」のテキストを選択し、言葉の特徴や八長調の音階の特徴を感じ取り、表現を工夫して簡単な旋律をつくります。ここでは、全3時間で題材を構成し、1単位時間に1つ~2つの評価規準を設定しています。

- 1 題材名 言葉の特徴を感じ取って旋律をつくろう 第1学年「A表現・創作」
 教材名 「おやおやおやさい」(石津ちひろ 文 / 山村浩二 絵)

2 題材の評価規準

音楽への 関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能
言葉のアクセントやリズム、八長調の旋律、構成(反復)などの特徴に関心をもち、それらを生かして音楽表現を工夫して簡単な旋律をつくる学習に主体的に取り組もうとしている。	リズム、旋律、構成(反復)を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取りながら、言葉のアクセントやリズム、八長調の旋律、構成(反復)などの特徴を感じ取って音楽表現を工夫し、どのように旋律をつくるかについて思いや意図をもっている。	言葉のアクセントやリズム、八長調の旋律、構成(反復)などの特徴を生かした音楽表現をするために必要な音の組み合わせ方、記譜の仕方などの技能を身に付けて簡単な旋律をつくらしている。

第1時から第2時にかけて評価する。

第2時から第3時にかけて評価する。

第3時に完成した作品で評価する。

本題材の第1時は、絵本を音読し、絵本の内容をイメージし、言葉のアクセントやリズムを感じ取ります。さらに、言葉のもつリズムやアクセント、八長調の音階の特徴、反復などの構成について理解した上で、旋律創作に取り組めます。(階名とリズム呼称で記録に残します)第2時は、引き続き、旋律創作に取り組むとともに、記譜の仕方を確認し、できた作品を五線譜に記譜します。第3時は、できた作品を学級で紹介し合い、よさを共有します。

3 本時の目標

言葉のアクセントやリズム、八長調の旋律、構成(反復)などの特徴に関心をもち、簡単な旋律をつくる学習に主体的に取り組む。

知覚・感受しながら、言葉のアクセントやリズム、八長調の旋律、構成(反復)などの特徴を感じ取って音楽表現を工夫し、どのように旋律をつくるかについて思いや意図をもつ。

4 本時(2/3)の指導と評価の計画

学習内容・学習活動	評価方法()とその進め方
前時に引き続き、音楽表現を工夫して旋律創作に取り組む。 ・旋律をつくるときのポイントとして、以下の3点を再確認する。 言葉が持っているアクセントやリズムをできるだけ生かす。 八長調の音階の構成音の確認と作品の終わりに終止感をもたせる。 反復などの構成を生かす。 ・アルトリコーダーや鍵盤楽器などで実際に音を出しながら、自分が選んだ絵本の言葉に合う旋律をつくり、ワークシート	《関 - 》 観察 この評価規準は、第1時から第2時(本時)にかけての創作活動の様子の観察により、評価する。 前時では、主に「十分満足できる」状況(A)にある生徒と「努力を要する」状況(C)にある生徒を把握していることを前提として、本時では、特に、前時に「努力を要する」状況(C)にあると判断された生徒を中心に適

(以下, WSと表記)に階名とリズム呼称で記録する。
記譜の仕方について理解し, つくった作品を五線に記譜する。

- ・リズム呼称と音符の対応(例: ツ =)について理解する。
- ・記録した階名とリズム呼称を基に, 自分の作品をWSの五線譜に記譜する。

つくった作品を紹介し, 自分の作品をつくるときに工夫した点をWSに記述する。

- ・グループでお互いに作品を紹介し合い, 自分の作品のよさやグループのメンバーの作品のよさについて意見交換をする。
- ・リズム, 旋律, 構成(反復)に着目して, 自分が選んだ言葉にふさわしい旋律をつくるために工夫したことを, WSに記述する。

切な指導を行い, 少なくとも, 「おおむね満足できる」状況(B)にあると評価することができるように努める。

《創 - 》

作品とワークシートの記述

WSに, リズム, 旋律, 構成(反復)に着目して, 自分の作品のよさや工夫点を記述しており, そのことが作品から読み取ることができるかを評価する。

この評価規準については第2時から第3時にかけて評価することから, 第3時の作品発表とよさや工夫点についての意見交換を経て, WSに書き加えた内容も含めて評価する。

第3時が終了した後の 生徒aのワークシート

①あなたが選んだ言葉を書こう!	きょうは いよいよ マラソン たいかい
②言葉に合う旋律ができたら音の高さ(ドレミ...)を書いてみよう!	ソ ミ ドドドド ララシド ド
③言葉に合う旋律ができたらリズム(ツ, ツーなど)を書いてみよう!	ン ツー ツ ツツツ ツックツック ツー ツー
※直接, 楽譜に書き記すことができる人はここに書いてもかまいません。	

次の時間に向けて, 上の旋律を完成させるときに, どのような音楽的な工夫をしようと思いますか。すでに工夫をしていることでもかまいません。「選んだ言葉」「リズム」「アクセント」「旋律」などの言葉を使って書きなさい。

選んだことばの マラソン大会のワクワクする感じが出るように ツックツックのリズムを使った。マラソン大会のもりあがりあそびが伝わりように ララシドドと 旋律がだんだん高くなるようにした。

付点のリズム (3時間目) よいとこのうけくれ
「きょうは」の部分は, はじめに ツ と使うなど, ことばのアクセントやリズムとあうように工夫した。



《音楽表現の創意工夫》の評価

リズム, 旋律, 構成(反復)に着目して, 自分の作品のよさや工夫点を2点以上記述しており, そのことが作品から読み取ることができるものを「おおむね満足できる」状況(B)と判断する。

生徒aのワークシートは, わくわくした感じを出すために付点のリズムを用いたことと盛り上がる様子を出すためにラシドという上行する旋律を用いたことが記されており, そのことは楽譜からも読み取れる。さらに, 第3時の作品発表と意見交換を経て, 「きょうは」の部分の音高やリズムが言葉のアクセントやリズムに合うように工夫していることを付け加えており, そのことは楽譜からも読み取ることができる。したがって, 「十分満足できる」状況(A)と判断した。

《音楽表現の技能》の評価

旋律をつくるときのポイントとして指導した3点のうち, 2点以上が楽譜から読み取ることができ, 楽譜の決まりに則っておおむね正確に五線譜に記譜できているものを「おおむね満足できる」状況(B)と判断する。

生徒aのワークシート(作品)は, ポイントの中で, 言葉のもっているアクセントとリズムを生かしている。八長調にふさわしい終止感をもたせている。同じリズムの繰り返しによる反復などの構成を工夫している。さらに, 楽譜の決まりに則って正確に五線譜に記譜できている。したがって, 「十分満足できる」状況(A)と判断した。

「音楽への関心・意欲・態度」と「鑑賞の能力」の評価の進め方が分かる事例

本事例は、「魔王」(シューベルト作曲/ゲーテ作詞/大木惇夫、伊藤武雄共訳)を教材とした鑑賞の題材の第2時 全3時間を示しています。学習指導要領の内容は、「B鑑賞」の指導事項ア、〔共通事項〕のうち、音色、リズム、旋律、強弱などを扱います。

音色、リズム、旋律、強弱の知覚・感受を深め、それらを意識しながら、登場人物に着目して、物語の様子を表現するためにシューベルトが工夫していることや歌手が表現を工夫していることを考えながら聴きます。さらに、物語と音楽との関わりについて解釈したり価値を考えたりし、それを言葉で表して、音楽のよさや美しさを味わう学習を展開します。ここでは、全3時間で題材を構成し、1単位時間に1つ~2つの評価規準を設定しています。

1 題材名 物語と音楽との関わりを探ろう 第1学年「B鑑賞」 教材名「魔王」

2 題材の評価規準

音楽への関心・意欲・態度	鑑賞の能力
「魔王」の音楽を形づくっている音色(声色)、リズム、旋律、強弱や構造と曲想との関わりに関心を持ち、鑑賞する学習に主体的に取り組んでいる。	「魔王」の音楽を形づくっている音色(声色)、リズム、旋律、強弱を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じている。知覚・感受しながら、「魔王」の音楽を形づくっている要素や構造との関わりを感じ取って、解釈したり価値を考えたりし、言葉で説明するなどして、音楽のよさや美しさを味わって聴いている。

第1時、第2時を通して評価する。

鑑 を第1時、鑑 を第2時と第3時に評価する。

本題材の第1時は、「魔王」の全体を通して聴き、音色(声色)、リズム、旋律、強弱を知覚・感受しながら、物語の内容や登場人物の心情などについての理解を深めます。第2時は、物語の内容や登場人物の心情を音楽で表現するためにシューベルトが工夫していることを第1時に知覚・感受したことと関連付けて考えます。第3時は、音色(声色)、強弱に着目して、歌手の表現の工夫について考えた上で、物語と音楽との関わりという視点から、シューベルトの「魔王」の魅力についての紹介文を書き、よさや美しさを味わって聴きます。

3 本時の目標

「魔王」の音楽を形づくっている要素や構造と曲想との関わりに関心を持ち、鑑賞する学習に主体的に取り組む。

知覚・感受しながら、「魔王」の音楽を形づくっている要素や構造との関わりを感じ取って、物語と音楽との関わりについて解釈しながら聴き、よさや美しさを味わう。

4 本時(2/3)の指導と評価の計画

学習内容・学習活動	評価方法()とその進め方
<p>「魔王」の音楽を形づくっている要素に着目しながら、物語の内容や登場人物の心情を音楽で表現するためにシューベルトが工夫していることを考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> 前時に「魔王」の前奏や楽曲全体を通して聴き、知覚・感受したことをワークシート(以下、WSと表記)の記述を読み返して確認する。 前時に語り手と登場人物(父、子、魔王)の心情(とその変化)について、学級全員で考えたことを、WSの記述を読み返して確認する。 前時に語り手と登場人物(父、子、魔王)の心情(とその変化)について、学級全員で考えたことを、WSの記述を読み返して確認する。 	<p>《関 - 》 ワークシート、観察</p> <p>「魔王」の音楽を形づくっている要素や構造と曲想との関わりに関心を持ち、鑑賞学習に主体的に取り組んでいるかということの評価するので、(第1時も含めた)WSへの記述の状況の評価する。「音楽への関心・意欲・態度」を評価するので、内容の適切さだけでなく、グループや学級全体で共有したことを赤ペンで書き加えている状況、記述の量なども含めて評価する。また、授業中の観察により、積極的に意見交換をしている姿などがみられた生徒についてはその点も考慮して、観察による評価も補完的に扱う。</p>

学習内容 ・ 学習活動	評価方法 () とその進め方
<p>・ 物語の内容や、語り手と登場人物の心情やその変化を音楽で表現するために、シューベルトが曲をつくるときに工夫していると思うことを考えながら「魔王」を聴き、語り手と父、子についての気付いたことをWSにメモする。(個人)</p> <p>予想される気付き</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 全体的に父の声が低く、子の声が高くなっている。 ・ 子の焦る気持ちが伝わるように、声がだんだん高くなっている。 ・ 最後の語り手の部分の伴奏がゆっくりとなって、宿に着いた感じになっている。 <p>・ 気付いたことについて、友達と自由に意見交換をして、新たな気付きについてはWSに赤ペンで書き加える。(ペアまたはグループ)</p> <p>・ 気付いたことを学級で出し合い、シューベルトが工夫していることについて共有化を図る。(全体)</p> <p>・ 再度、「魔王」を通して聴き、本時の学習において出た気付きを確認する。</p> <p>・ 本時では取り扱わなかった登場人物である魔王に着目して、「魔王」を聴取し、魔王の心情とその変化を音楽で表現するためにシューベルトが工夫していると思うことをWSに記述する。(個人) 本時の記録に残す評価の資料</p> <p style="text-align: center;"></p> <p>第3時の最初にこの記述内容についても、学級内で共有化を図り、第3時における学習に生かすようにする。</p>	<p>この観点については、第1時と第2時を通して評価するので、例えば、次のような方法が考えられる。</p> <p>第1時では、全体を把握しながら、特に「十分満足できる」状況(A)にある生徒と「努力を要する」状況(C)にある生徒の把握に努める。「努力を要する」状況(C)にある生徒については適切な指導を行う。</p> <p>第2時では、前時に「努力を要する」状況(C)にあった生徒を中心に再度、評価をするとともに、第1時では、「おおむね満足できる」状況(B)にあった生徒についても、意欲の高まりが見られれば、評価結果を「十分満足できる」状況(A)に修正する。</p> <p>《鑑 - 》</p> <p>グループまたはペアによる意見交換や学級内での共有化を図る場面において、教師は形成的な評価とそれに基づく適切な指導を行い、終末のWS記述において、全ての生徒が少なくとも、「おおむね満足できる」状況(B)以上となるようにすることが大切である。</p> <p>例えば、シューベルトが工夫していることについての気付きについては、必要に応じて、同じ登場人物の部分だけを編集した音源で確認させることや、楽譜上で実際に音高やリズムなどに印を付けさせるなどして視覚的に確認させることなどの工夫を行うことが考えられる。</p> <p>ワークシート (授業の終末で魔王の心情やその変化を音楽で表現するためにシューベルトが工夫していると思うことの記述)</p> <p>「おおむね満足できる」状況(B) シューベルトが工夫していること(リズム、旋律、強弱や構造)とそのことによってどのような心情が表されているか(曲想)を1つ記述している。</p>

生徒bのワークシートの記述

今から「魔王」を通して聴きます。登場人物である魔王の心情やその変化を音楽で表現するためにシューベルトが工夫していると思うことを書いてください。そのことによってどのような心情をあらわそうとしているかについても書いてください。

・ 魔王のセリフのところだけ、ダダダダダ…という伴奏じゃなくて、なめらかな感じになっている。それから、魔王の部分は他のところにくらべて、明るい感じになっている。たぶん、子どもに「楽しいところだからおいで」とだましている感じが出ているようにしていると思う。

生徒bのWSでは、「ダダダダダ…という伴奏じゃなくてなめらかな感じになっている」という記述から魔王のセリフの部分の伴奏形の変化に気付いていることが読み取れる。(リズム)また、「明るい感じになっている」という記述から、調性の変化(短調 長調)に気付いていることが読み取れる。(旋律)これら2つのことに気付いており、さらに、そのことは「魔王が子どもをだましている感じが出るように」という魔王の心情についても記述している。

以上のことから、生徒bの鑑 - の評価については、「十分満足できる」状況(A)であると判断した。

中学校音楽科における学習評価の進め方 Q & A

Q これまで、題材の評価規準とは別に、それを更に具体化した評価規準を設定していましたが、それではいけないのですか？

A 「題材の評価規準」を設定した上で、必要に応じて、題材の評価規準を更に具体化した「学習活動に即した評価規準」を設定することも考えられます。しかしながら、その際に、「題材の評価規準」と「学習活動に即した評価規準」との間にずれが生じて、適切な評価が行われていなかったことや、設定する作業が大変であったことなどの課題もありました。そこで、そのような課題を解決するために、題材の評価規準を実際的评价規準として用いる方法を示しています。学習評価の妥当性を高めるためには、評価しようとした目標と評価結果に適切な関連があることが大切です。具体化した評価規準を設定する際には、その点に十分に配慮することが必要です。

Q これからは1単位時間に1回または2回程度、評価を行えばよいということですか？

A これまでは、指導に生かすための形成的な評価と通知表や指導要録などのために記録に残す評価を混同して、1単位時間に数多くの評価規準を設定している場合が多く見られました。その結果、1単位時間の中で、個々の生徒の学習状況を確実に評価できていなかったことも多かったと思います。これからは、通知表や指導要録などのために記録に残す評価については、1単位時間に1回または2回程度でよいかかわりに、設定した評価規準については、確実に個々の生徒の学習状況を評価し、記録に残すことが必要となります。その評価は本時の指導目標が達成できたかどうかという教師自身の評価にもなりますので、すべての生徒が、最低でも「おおむね満足できる」状況（B）と判断できるようにしたいものです。そのためには、従来までのように、それまでの学習過程における生徒の学習状況を形成的に評価し、それに基づく適切な指導を行うことが必要ということはいまでもありません。

Q 1単位時間の中で、全ての生徒の学習状況を評価するのは難しいと思いますが、何かよい工夫はないでしょうか？

A 1単位時間の中で、全ての生徒について評価を行うのは確かに難しいと思います。「音楽表現の創意工夫」や「鑑賞の能力」などの観点については、授業の終末などでワークシートに記述させるなどして、その記録をもって評価することなどの方法をとることも考えられます。ワークシートやノートの記述、作品、レポートなど、授業後に教師が確認しながら評価を行うことができる方法と、授業中の見取りを適切に組み合わせるなどして、学級全員の学習状況を無理なく適切に見取ることが大切です。また、「音楽表現の技能」や「音楽への関心・意欲・態度」などの観点については、実際の学習場面や音楽表現をしている場面を観察したり、聴取したりして評価することが中心となりますので、例えば、2時間を通して評価を行うような計画を設定したり、できるだけ簡便な教師用チェックリスト（右の資料）などを準備して、計画的に評価を進めるなどの工夫が大切となります。

アルトリコーダーの学習における「音楽表現の技能」教師用チェックリスト 例

チェック項目	構え方	タンギング	プレス	サミング	気付き
生徒氏名1	←				指を見ながら吹いている。
生徒氏名2	レ	レ	レ	レ	
生徒氏名3	レ			←	すき間が広すぎてシがうまく出ない。
生徒氏名4	レ		レ		

※ チェックの仕方
 よくできている……………レとチェックする。
 おおむねよくできている……………空欄とする。
 改善の必要あり……………気付きの欄に、つまづいている点などをメモする。

Q 収集した評価の記録を総括するにはどのようにしたらよいですか？

A 収集した評価の記録を総括する場合には次のような2つの場合が考えられます。

- 一つの題材の中で、複数設定した評価規準の評価結果を総括する場合
- 学期末や年度末において、複数の題材における評価結果を総括する場合

の場合に関わっては、例えば、右の表のように評価規準を設定して授業を行ったとすると、「音楽への関心・意欲・態度」及び「音楽表現の創意工夫」について、それぞれ《評価規準 》と《評価規準 》の評価結果が得られることとなります。このときに、2つの評価結果が異なる場合は、それぞれの観点について、次のア、イ、ウのような総括の仕方が考えられます。

《本題材のおおまかゝる流れ》
「夏の思い出」と「浜辺の歌」を歌い比べて、それぞれの歌詞や曲想に関心をもち、音楽を形づくっている要素を知覚・感受することに重点を置いて、「夏の思い出」の歌唱に取り組む。さらに、「夏の思い出」の学習を生かしながら、「浜辺の歌」の音楽表現を創意工夫し、曲にふさわしい表現で主体的に歌唱する。

時	題材における評価 主な学習活動	評価の観点			評価の回数
		音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能	
1	「夏の思い出」「浜辺の歌」の歌詞、曲想などに関心をもち、	評価規準① 学習内容への関心等			1
2	音楽を形づくっている要素を知覚・感受し、「夏の思い出」を歌唱する。		評価規準① 主に要素の知覚・感受		1
3	前時の学習を生かして、「浜辺の歌」の音楽表現を創意工夫する。		評価規準② 主に知覚・感受に基づく表現の工夫等		1
4	曲にふさわしい表現で主体的に「浜辺の歌」を歌唱する。 題材全体の学習を振り返る。	評価規準② 主体的な取り組み 学習全体への関心等		評価規準① 創意工夫したことを生かして歌唱する技能	2

- ア 《評価規準 》、《評価規準 》が順に「A, B」「B, A」「B, C」「C, B」の場合は、学習の深まりや向上などを考慮した上で、《評価規準 》の評価結果を総括の評価結果とする。
- イ 《評価規準 》が「A」、《評価規準 》が「C」の場合は、「B」と総括する。
- ウ 《評価規準 》が「C」、《評価規準 》が「A」の場合は、学習が進むにつれて《評価規準 》に関わる学習状況に改善等が見られれば「A」と総括する。

の場合に関わっては、例えば、右の表のような総括の仕方などが考えられます。この例では、「A」の数と「B」の数が同数であった場合は、学期や年間を見通した総括を「A」とするという考え方をとっていますが、この他にも、題材の目標、指導内容、取り扱う時数などを勘案した上で、特に重視することが妥当と考えられる題材の評価結果に重み付けを行うなど、総括には様々な方法がありますので、各学校において工夫することが必要です。

第3学年 2学期の題材における総括例

《領域・分野》 題材名(取扱い時数)	題材の概要 (主に取り扱う教材)	学習要領の内容	評価の観点			
			関	創	技	鑑
《表現・歌唱》 歌詞の内容を思い浮かべ、曲想を味わいながら表現を工夫して歌おう(3時間)	歌詞の内容や曲想を味わい、曲にふさわしい音楽表現を工夫して歌う。 (「荒城の月」)	歌唱ア 〔共通事項〕リズム、速度、旋律、強弱	B	B	A	
《鑑賞》 歌舞伎の魅力を探ろう(3時間)	要素や構造と曲想との関わり、他の芸術との関連を理解して鑑賞する。 (「歌舞伎「勸進帳」より)	鑑賞ア、イ 〔共通事項〕音色、旋律、強弱	B			A
《表現・器楽》 速度や音の重なりを工夫してアルトリコーダーアンサンブルをしよう(4時間)	曲想を味わい、声部の役割を理解して、速度などの表現の工夫をしながら合わせて演奏する。 (「さとうきび畑」) リコーダーアンサンブルに編曲	器楽ア、ウ 〔共通事項〕音色、速度、旋律、テクスチャ	A	B	C	
《表現・創作、鑑賞》 箏曲に親しみ、箏のための旋律をつくらう(5時間)	箏の音色、奏法などの特徴を捉え、構成を生かして箏のための旋律をつくるとともに、箏曲を味わって聴く。 (箏曲「六段の調」)	創作ア、鑑賞ア、イ 〔共通事項〕音色、速度、旋律、構成	A	A	B	B
〔関:「音楽への関心・意欲・態度」、創:「音楽表現の創意工夫」、技:「音楽表現の技能」、鑑:「鑑賞の能力」〕			上記の4題材の結果を総括した例 →			
			A	B	B	A

この他にも、評価結果を蓄積する際に、例えば、A = 3, B = 2, C = 1 などのように点数化しておいて、それらを算出して総括する方法や、個々の評価結果を点数化するなどして蓄積しておき、学期単位でまとめて総括する方法が考えられます。これらのことについては、各学校において十分に検討する必要があると思います。また、評価に対する妥当性や信頼性を高めるために、学校内での情報交換を行うことや、必要に応じて、教師間の共通理解を図り、生徒及び保護者に十分に説明を行うことも大切です。

この手引きは、国立教育政策研究所で公開されている「評価規準の設定、評価方法等の工夫改善のための参考資料」(中学校)などを参考にして、作成しています。詳細については、以下のURLをご参照ください。

<http://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidousiryuu.html>